

# 第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

## 報告書資料 一般 - 24

学校名・団体名	加茂市立須田小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	子供自らが成長を実感できる学校づくり

### 【活動内容】

「主体的な学び」は新学習指導要領のキーワードである。このことが日常的に成立する教育環境づくりを進めることが学校の責務である。自校では、全教員が同じベクトルで実践の積み重ねができるため、「新しい概念（言葉・考え方）を、既習の知識（内容・方法）や言葉を組み合わせながら説明し合う姿」を目標に授業改善を図ってきた。そして、さらに一歩進め、子供の視点から見直したものが、本研究テーマにある「自らが成長を実感できる」学びをしている姿である。このために次のような取組を重点的に行った。

#### 1 見方・考え方の広がりを実感できる「対話スキル」の全校指導

新学習指導要領で重視する言語指導から、3つの要素（根拠・例示・一般化）に焦点化した指導を全校で実施する。授業の中に意識的に活用する場面を設定し、その活用度を「見方・考え方の広がり」の評価指標として授業改善に生かす。

#### 2 教科学習を通して生まれた疑問を発展的に学習する地域学習「須田dy科（すたでいか）」の実施

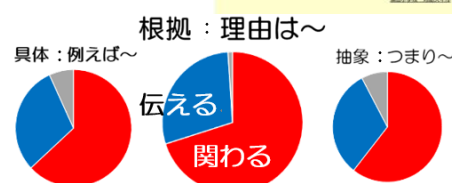
生活科・総合的な学習の時間から、発展学習として数時間から十数時間程度の時間を地域学習「須田dy科」として単元化して指導を行う。教科学習として学んだことが、今の自分の生活と関わりがあることを意識し感謝の気持ちをもつとともに、よりよい自分（地域）につないでいくための知恵を地域に発信していく学習活動を全学年で実践する。

### 【活動の実際】

#### 1 対話スキルを通じた授業改善

子供同士で対話が連続化するために、右図にあるように、スキルを3つの「接続詞」に置き換えた。この3つの接続詞を組み合わせることで「相手に伝える」ことを指導している。さらに、不足している要素を質問し合うことで、「相手に伝わる」発表だったかどうか、子供自身で振り返る言語環境づくりを行っている。

全学年・全教育活動で積み重ね指導を行うことで、「〇〇さんと同じ（意見）です」で終わせず、「でも、理由は少し違って～」や「例えば例を出して説明してください」など関わり合う姿が多くなってきた。（平成30年12月実施学習アンケートで、9割以上達成）



※伝える：発表に活用 関わる：発表・質問に活用

#### 2 地域学習「須田dy科（すたでいか）」を通じた主体的な学び～6学年「対立から対話への知恵探し」・5月…学習パンフレット「義か理か 加茂と会津」を使った修学旅行事前学習を行った。学習パンフレ

ットは、事前に専門家（加茂市史編纂室職員）から見て頂き修正作業を行った。

- 6月 修学旅行「会津若松」では、学習班に分かれ調べ活動を行った。史料館見学を通して、会津での大きな被害の様子を目の辺りにして、「白虎隊の悲劇を防ぐ方法はなかったのか」という大きな追求目標を子供たちはもった。



※パンフレットでの事前学習



- 9月 社会科学習「江戸時代」の学習では、260年間も太平の世が続いた江戸幕府がつぶれたことと、修学旅行後の疑問（上述）とを繋げて、「江戸幕府がつぶれる中で起こった戊辰戦争の様子を詳しく調べ、白虎隊の悲劇を防ぐための方法を見付ける。そこから、これからの自分たちの生活にも生きる知恵を探す」というテーマに重ね合わせていった。

- 10月 戊辰戦争（対立）は、①誰と誰が何で対立したのか②加茂軍議の様子を中心に調べ活動を進めた。身分制度（士農工商や、武士の上下関係）が対話の邪魔をしていることに気付くだけでなく、「思ったことを言わないでおこうと遠慮する今の自分と重なる」など、今の自分に置き換えて考えていた。



※調べ活動の様子

- 11月 ゲストティチャー（加茂市史編纂室職員）から、加茂軍議と須田との関係について教えて頂いた。自分たちが見学した白虎隊の悲劇は、戊辰戦争の方向性を決めた「加茂軍議」と大きな繋がりがあることに驚くとともに、学習したことを自分自身に置き換えて、「対立ではなく対話で解決するための知恵」を学習劇の中に取り入れていくことに繋がった。



※ゲストティチャーから学ぶ

- 1月 学習劇の台本づくりを行う。全員参加（21名）、3幕構成（加茂軍議の前・中・後）を基本にした台本を提示した。当時の身分制に縛られて対立（戊辰戦争）に向かわざるを得なかった武士たちの様子が「伝わる」ように、歴史的事実を基に構成した台本の「地の文」や「せりふ」、「所作」の部分に、自分たちの言葉で書き加える作業を各グループで話し合いながら行った。これまでの学習を振り返り、登場人物の気持ちを想像して書き加え作業を行った。

- 1月 グループ間で劇練習をタブレット PC で撮影し合い、登場人物の気持ちが「伝わる」ものであったか、より観客に「伝わる」ものにするための改善点（読みスピード・声の高さ・間の取り方）を検討し合った。タブレット PC の映像を見ることで、自分たちの演技を客観的に批評し合うことができた。例えば、「身体を観客に向けて話す（登場人物の真剣さが伝わる）」「視線の高さを変える（当時の身分の差が感じられる）」「ナレーション中の無言劇（当時の状況がより伝わる）」など、気付いたことを台本に書き込み（振り返り）、劇表現に厚みが出てきた。

- 2月 保護者から舞台衣装（袴）作りを協力していただいた。
- 2月 最後の学習参観日を発表の場にして、保護者や他学年からも見てもらった。低学年には難しい内容であったが、「なんで怒っているのか確かめる」「けんか（対立）したらどうなるか考える」など6年生のメッセージ「対話するための7つの知恵」は、現在の生活との接点を見付けることができた発表会になった。



タブレットPCで撮影



タブレットPCで検討



保護者による袴制作



学習劇の一場面

#### 【成果と今後の展開】

- 「伝える」ための論理的な思考だけでなく、「伝わる」ための話し方（表情やしぐさ等の感情表現）の大切さを改めて学んだ。先人の生き方を決めた背景（身分制）と今の自分の課題（人間関係づくり）を繋げて考えることができた。また、「加茂軍議」という過去から学ぶことの大切さを発信することができた。
- 「学習したことを実際の生活に生かすことができる」場として6年生の実践を取り上げた。これをベースに、各学年の「須田 d y 科」を見直していく。その際、これまでの表現力の育成面でのネックとなっていた「伝わる」力の面を高めるための客観的評価するツールとして、タブレット PC を活用していきたい。